

中国の大学院における日本語通訳・翻訳教育の現状と課題¹

—曲阜師範大学を例に—

宋曉凱・権慶梅・徐鳳²

要旨

高度な日本語ができる中国人通訳・翻訳者を養成するために、中国各地の大学で日本語通訳・翻訳修士課程が設置されているが、大学院における日本語通訳・翻訳教育はどのように行われているかに関しては、十分な議論が行われていない。本稿では、事例をもとに、中国の大学院における日本語通訳・翻訳教育の実態、存在している課題と今後の動向を検討したい。

キーワード：大学院，日本語教育，通訳・翻訳修士課程

I. はじめに

中国の経済発展に伴い、様々な領域における中日両国の交流がますます頻繁に行われてきている。日本からの投資は年々増加傾向にあり³、2011年日本人観光客数は365万人⁴に達するなど、日本人にとって魅力的な観光地になっている。このような状況のもとに、日本語特に高度な専門用語ができる中国人通訳者、翻訳者の育成が求められている。しかし、これまで中国の大学院における日本語教育は日本語言語学、日本文学と日本文化などの分野に限られていた。一部の大学院では日本語翻訳学の専攻が設けられたが、それも理論的な研究にとどまっていた。2007年、中国の国務院学位委員会は高度な通訳・通訳人材を求める市場ニーズに応え、通訳・翻訳修士課程（Master of Translation and Interpreting, 略してMTI）の設置を許可した。これにより、大学院では専門日本語通訳者、日本語翻訳者の育成ができるようになった。

本稿の目的は、曲阜師範大学日本語通訳・翻訳修士課程（以下では、日本語MTIと略する）を例に、中国の大学院における日本語通訳・翻訳教育について報告し、学生対象のアンケート調査などを踏まえ、日本語通訳・翻訳教育の特徴と課題、また、今後の動向を示したい。

II. 中国における日本語MTIの現状

近年、中国高等教育の発展に伴い、日本語専攻を設ける大学が急速に増え、大学院における日本語教育も大きな発展を遂げた。中国教育部の統計データによれば、2013年時点で、中国の大学数は1,166校あり、うち国立大学879校、私立大学287校になっている。また、短期大学は1,266校である⁵。日本語専攻を設けた大学は385校、短期大学は200校を超えた⁶。一方、大学院における日本語教育も急速な発展が見られた。日本語言語学博士課程（学術学位）の設置大学は2002年の3校から2013年の15校に、日本語言語学修士課程を設置した大学は1999年の22校から2013年の86校に

表1 中国における日本語 MTI の発展状況

地域	大学名	専攻	募集人数	学制	年間授業料 (元)
北京	北京大学	翻訳・通訳	翻訳 15 名, 通訳 15 名	2年	翻訳 2.5 万, 通訳 4 万
	北京外国語大学	翻訳・通訳	合計 8 名	2年	一律 1 万
	北京第二外国語学院	翻訳・通訳	翻訳 20 名, 通訳 20 名	2年	0 元
	對外經濟貿易大学	通訳	通訳 30 人	2年	3 万
	国際関係学院	翻訳・通訳	翻訳 3 人, 通訳 2 人	2年	—
遼寧	大連海事大学	翻訳	—	2年	1.2 万
	遼寧師範大学	翻訳・通訳	翻訳 7 名, 通訳 7 名	2年	—
	大連外国語学院	翻訳・通訳	翻訳 20 名, 通訳 15 名	2.5年	1.2 万
広西	広西大学	翻訳	—	—	—
	広西師範大学	翻訳・通訳	翻訳 6 名, 通訳 4 名	2年	0.8 万
山西	山西大学	翻訳	翻訳 10 名	2 年	—
	太原理工大学	翻訳・通訳	合計 10 名	2 年	0 元
吉林	吉林大学	翻訳・通訳	翻訳 10 名, 通訳 8 名	2 年	1.2 万
	吉林華橋外国語学院	通訳	通訳 10 名 (うち, 日韓 通訳 2 名)	2 年	1.2 万
福建	アモイ大学	翻訳・通訳	合計 8 名	2~3 年	1.1 万
広東	広東外語外貿大学	通訳	通訳 20 名	2 年	—
貴州	貴州大学	翻訳	翻訳 15 名	3 年	—
山東	山東科技大学	翻訳・通訳	翻訳 7 名, 通訳 16 名	2年	0 元
	曲阜師範大学	翻訳	翻訳 10 名	2年	0 元
	青島大学	翻訳・通訳	翻訳 5 名, 通訳 4 名	2年	0 元
	煙台大学	翻訳・通訳	翻訳 5 名, 通訳 5 名	2年	—
河南	河南大学	翻訳・通訳	翻訳 5 名, 通訳 3 名	2~3年	0.7 万
	河南師範大学	翻訳	翻訳 5 名	2年	0 元
陝西	西安交通大学	翻訳・通訳	—	2年	2.4 万
	西安外国語大学	翻訳・通訳	—	2~3年	—
黒龍江	ハルビン理工大学	翻訳・通訳	—	2 年	—
	ハルビン師範大学	翻訳・通訳	翻訳 8 名, 通訳 8 名	2 年	—
天津	天津外国語大学	翻訳・通訳	翻訳 12 名, 通訳 18 名	2 年	0 元 (8 割の学生)、 0.6 万
河北	河北大学	翻訳・通訳	翻訳 4 名, 通訳 7 名	2 年	0.7 万
江蘇	南京大学	翻訳	翻訳 10 名	3 年	1 万
浙江	浙江工商大学	翻訳	翻訳 15 名	2.5 年	0 元
湖南	湖南大学	翻訳	翻訳 6 名	2~4 年	1.3 万
上海	東華大学	翻訳	—	2 年	1 万

出所：各大学のホームページより作成

注：—は公表されていないことをさす。

増えた⁷。

日本語言語文学修士課程を設置した大学の分布は下記の通りである。北京は北京大学、清華大学など11校、東北地方は吉林大学、大連外国語学院など13校、上海は、上海外国語大学、復旦大学など9校、江浙地方（江蘇省と浙江省）は南京大学など12校ある。そのほかに、山東6校、天津3校、湖北4校、湖南2校、福建2校、広東4校、四川1校、重慶3*校、河南3校、陝西4校、雲南2校、江西1校、河北3校、山西1校、内モンゴル1校、広西1校である。このように、日本語言語文学修士課程を設置した大学は北京、東北地域、上海、江浙地方に集中しており、半数以上を占めている。

2007年、国務院学位委員会が制定した「MTI 専門職学位設置法案」の実施を契機に、多くの大学はMTIを設置するようになった。2013年現在、日本語MTIを設置した大学は計33校である。吉林華橋外国語学院は33校のうち唯一の私立大学である。33校は16の省と直轄市に分布しており、最も集中しているのは北京市で、5校もある。設置数の少ない地域は広東省、河北省、上海などで、1校のみである。設置されていない地域は雲南を含めて14地域もある。

日本語言語文学修士課程を設置した大学は86校であることに対して、日本語MTIの設置校は33校で、言語文学修士課程を設置した大学の半数以下である。一方、英語MTIを設置した大学は134校で、英語言語文学修士課程を設置した156校からみれば、行き渡っていることがわかる。このことから、日本語MTIの設置は遅れているといえよう。

中国における日本語MTIの発展状況を表1からみてみると、日本語MTIは翻訳と通訳の二専攻からなっている。二専攻を開講している大学は20校で、通訳のみ3校、翻訳のみ10校である。吉林華橋外国語学院の日本語MTIは通訳専攻であるが、日中通訳のみならず、

日韓通訳も開講している。

募集人数は大学によって異なるが、日本語教育と研究において実力のある大学ほど人数が多いことがわかる。例えば、北京大学、北京第二外国語学院と対外貿易大学は30人～40人の定員枠がある。それに対して、通訳翻訳の実務に詳しい教員、設備などで制約のある大学は、定員枠が少ない。河南師範大学日本語翻訳専攻の定員枠は5人しかない。全国的な統計は公表されていないため、年間募集人数が明らかになっていないが、およそ450名と推定できよう。

中国MTI教育指導委員会が作成した「MTI 大学院生モデル育成方案」によると、MTIの学制は2年と定められている。それにしたがって、ほとんどの大学は学制を2年と設定した。しかし、一部の大学は2.5年、または3年にしている。例えば、大連外国語大学と浙江工商大学は2.5年、南京大学は3年である。一方、アモイ大学や湖南大学などは柔軟な学制と取っており、2年～4年となっている。

授業料（学費）をみると、高額な授業料を徴収する大学とまったく徴収しない大学に分かれている。例えば、北京大学の通訳専攻は最も高く年間4万円で、それに次いで対外経済貿易大学の通訳専攻は年間3万円である。一方、一部の地方大学、例えば河南師範大学や山東科技大学は授業料を徴収しないのみならず、月あたり200～300元的生活費をも支給している。これは学生を確保するためだと考えられる。

日本語MTIの発展状況からわかるように、大学院における日本語通訳・翻訳教育は日本語研究と教育において実力のある大学のみならず、多くの地方大学でも行われている。地方大学では、日本語MTI学生の募集、教育などどのように行われているか、曲阜師範大学の事例を通じて考察してみる。

Ⅲ. 曲阜師範大学日本語 MTI の実態

曲阜師範大学の日本語 MTI は 2011 年に設置され、通訳専攻を設けておらず翻訳プログラムのみである。同大学はどのように翻訳者を養成しているかをみてみよう。

1. 日本語 MTI 教育カリキュラム

同大学の日本語 MTI の教育カリキュラムによると、学生の教育目標は、1. ヒアリング、会話、読解、作文などの基本言語能力のうえで、翻訳学の基本知識を習得し、日中と中日翻訳実践能力を養う。2. 翻訳学、異文化コミュニケーション、経済、法律、科学技術に関する専門知識を有し、特定の専門領域において独自に翻訳業務を担当する能力を養う。3. 思惟能力を持ち、翻訳実践に基づき実践報告書を作成することができる、などを掲げる。

(1) 応募条件と選抜方法

中国 MTI 教育指導委員会が作成した「MTI モデルカリキュラム」によると、MTI の応募条件は大卒者または同等の能力があると認められる者である。募集初年度、同大学はモデルカリキュラムに従い、同等の能力を有する者の応募を認めたが、実際には同等の能力を有する者が非常に少ないため、教授会の判断により、翌年から応募条件からはずした。現在、同大学の日本語 MTI に応募できるのは日本語専攻の大卒者のみである。

学生の選抜は下記のように行われている。選抜試験は 1 次試験と 2 次試験がある。1 次試験は、「日本語」（100 点満点）、「翻訳基礎」（150 点満点）、「思想政治理論」（100 点満点）及び「中国語作文与百科知識」（150 点満点）の 4 科目からなっている。専門の 2 科目と「中国語作文与百科知識」は大学が独自に試験問題を作成するが、「思想政治理論」の試験問題は中国教育部によって作成される。1 次試験は教育部が指定した試験日と場所に

て統一的に行われる。採点について、「思想政治理論」は教育部が採点するが、それ以外の科目は試験問題を作成した大学の教員が採点することになっている。最終的に教育部が受験者の成績を集計し、当該年度の定員枠に基づき、「政治思想理論」科目の合格最低点と 4 科目の合計合格最低点を決める。そのうえで、各大学は教育部に割り当てられた定員枠と受験者の成績により、2 次試験の資格者を決定する。一般的に 2 次試験の資格者は定員枠の 1.2 倍である。2 次試験の受験科目は大学によって異なるが、受験者が応募した大学で受けることになっている。同大学の 2 次試験は「中日翻訳」（100 点満点）、「第二外国語」（100 点満点）と「面接（専門と英語会話）」からなっている。1 次試験と 2 次試験の合計点が受験者の最終点数になる。

同大学の受験点数計算式は下記の通りである。

$$\begin{aligned} \text{最終点数} &= 1 \text{ 次試験合計点} \times 50\% + 2 \text{ 次試験の合計点} \times 50\% \\ &= 1 \text{ 次試験合計点} / 5 \times 50\% + 2 \text{ 次試験の合計点} \left(\begin{aligned} & \left[\text{「中日翻訳」の点数} \times 30\% + \text{「第一外国語」の点数} \times 30\% + \text{「面接」} \right. \\ & \left. \text{の点数} \times 30\% \times \text{「英語会話」の点数} \times 10\% \right] \times 50\% \end{aligned} \right) \end{aligned}$$

ただし、いずれの科目は、合格点以上の点数を取ることができなければ、合格できないことになっている。

同大学日本語 MTI の学制は 2 年である。1 年目は大学で理論と実践練習の講義を受け、2 年目から翻訳会社などでインターンシップすることになっている。授業は、平日開講になっているため、社会人の入学者は 1 年間仕事を休み、学校に通うことになる。

(2) 単位履修と修了要件

中国 MTI 教育指導委員会の作成した「MTI モデルカリキュラム」によると、MTI の学生は、修了するには必修科目と選択科目をあわせて 38 単位以上を取得しなければならない。

それに基づき、曲阜師範大学の日本語 MTI 専門必修科目 (10 単位)、専門選択履修科目 (8 単位)、専門実践 (4 単位) の四つに分け、

表 2 日本語 MTI の履修科目及び単位数

学位基礎科目 (16 単位)	一般教養基礎科目 (6 単位)	政治理論 (3 単位) 中国言語文化 (3 単位)
	専門基礎科目 (10 単位)	翻訳概論 (2 単位) 基礎通訳 (2 単位) 基礎翻訳 (2 単位) 中日社会文化翻訳 (2 単位) ビジネス翻訳 (2 単位)
専門必修科目 (10 単位)		古代中国語 (2 単位) 中日言語比較と翻訳 (2 単位) 中日交流史 (2 単位) 高級通訳 (2 単位) 中日文学翻訳 (2 単位)
専門選択科目 (8 単位)		法律翻訳 (2 単位) 経済応用文翻訳 (2 単位) 翻訳実践講座 (2 単位) 同時通訳 (2 単位) 医療翻訳 (2 単位) 科学技術翻訳 (2 単位)
専門実践 (4 単位)		翻訳実践 (中国語→日本語 5 万字, 2 単位) 翻訳実践 (日本語→中国語 5 万字, 2 単位)

注：大学の日本語 MTI カリキュラムにより作成。

学生に 38 単位の取得を求めている (表 2)。さらに、単位の認定にはならないが、教育の一環としてインターンシップの研修を学生に求めている。しかし、大学の所在地には日系企業や翻訳会社などが少ないため、インターンシップの受け入れには問題が生じた。一般社団法人国際産学交流協会の協力を得て、短期の無報酬インターンシップ⁸として 6 名の学生を日本の旅館やホテルに派遣できたが、それ以外の学生は各自で受け入れ先を探すことになった。

同大学日本語 MTI の修了要件は、大学院に 2 年以上在学し、38 単位以上を修得し、かつ、

必要な研究指導を受けた上、日本語 MTI の目的に応じ、翻訳理論研究論文、翻訳プロジェクト報告または翻訳実験報告の審査に合格することとしている。翻訳プロジェクト報告とは、指導教員の指導の下で、1 万字以上の文章を翻訳し、翻訳過程に直面した様々な問題について 5,000 字以上の研究報告書をまとめたものである。翻訳実験報告は、翻訳実験のある部分について実験を行い、その結果分析し、1 万字以上の実験報告をまとめたものである。翻訳研究論文とは翻訳の理論に関する文章を作成し、1.5 万字以上のものである。2013 年 6 月に修了した同大学日本語 MTI 大

大学院生の全員は翻訳プロジェクト報告を選択し、日本語の文章または本を翻訳し、研究報告書をまとめた。

同大学日本語 MTI では、学位論文は3回の審査が行われる。まず、学内教授会で審査することになっている。問題がないと判断されれば、外部の教員（2名）に匿名審査を依頼する。匿名審査で2名の審査員から合格点以上と判断されれば、論文審査会での発表にかける。そこで問題がなければ、無事に修了することができる。

2. 在籍者と教員の状況

同大学日本語 MTI の学生募集状況は表3のとおりである。日本語 MTI の定員は2011年と2012年は10名であったが、2013年は13名に増加した。教員の増加により定員が増加したのである。応募者数は微増ではあるが、増えつつある。しかし、合格者数には大きな変動がみられた。2011年定員10名に対して、合格者数は16名に達した。同年度、他専攻の応募者が少なかったため、大学全体の大学院生数を維持するために、大学は他専攻の定員枠を日本語 MTI に割り当てた結果、定員枠を超えた合格者数となった。一方、2012年と2013年の合格者数はいずれも定員枠を下回った。2013年6月現在、計25名の学生が在籍している。

表3 同大学日本語 MTI の学生募集状況

	定員	応募者数	合格者数
2011年	10名	24名	16名
2012年	10名	26名	9名
2013年	13名	32名	10名

注：大学の内部資料により作成。

同大学の日本語科には計12名の教員がいるが、日本語MTIの指導教員は5名のみである。

同大学の規定によると、修士課程の指導教員資格は、准教授か博士号を持つ講師でなければならない。しかも、大学が認定したBランク以上の論文2本発表という条件も課されている。常勤教員の専門はそれぞれ日本文化、教育学、日本文学、経営学と経済学である。5人のうち、4人は留学生か国際交流員として日本に滞在し、国際会議通訳や、翻訳などの実務経験を持っている。さらに、モデルカリキュラムに基づき、副指導教員制度を設けたが、同大学の所在地には日本語翻訳実務経験者がほとんどいないため、機能していないのが現状である。

3. アンケート調査と分析

2013年5月に曲阜師範大学日本語 MTI に在籍している25名の学生を対象に、学生の属性、MTI教育の評価と要望などに関するアンケート調査を実施した。全員からの回答を得られ、その結果は次の通りである。

学生の性別を見ると、25名のうち、男性1名、女性24名である。一般的に外国語を専攻する男子学生は少ないが、大学院に進学する男子学生がさらに少ない。

出身校をみると、2011年度入学者の8人（50%）は遼寧師範大学、吉林化工学院など他大学から進学したもので、残りの8人は曲阜師範大学の卒業生である。2012年度入学者9人のうち、他大学から進学した学生は4人である。半数の学生は同大学の出身者である。

学生の年齢については、22歳から34歳までの広い年齢層の学生が就学している。22歳から24歳までの年齢層は6名（24%）で、25歳から29歳までの年齢層17名（68%）、30歳から34歳までの年齢層2名（8%）、35歳以上の学生がいない。30代以下の学生が多いことがわかった。

入学以前の正社員としての就業経験は、「経験がある」6人（24%）、「経験がない」19

人(76%)である。全体の76%の学生は正社員としての業務経験がない。

翻訳実務経験については、現役2名(8%)、経験あり13名(52%)、経験なし9名(36%)、無回答1名(4%)という結果であった。「現役」と「経験あり」をあわせて、合計15名(60%)の学生が翻訳実務に関わっている。一方、通訳実務経験については、現役2名(8%)、経験あり11名(44%)、経験なし11名(44%)、無回答1名(4%)という結果であった。「現役」と「経験あり」をあわせて、合計13名(52%)の学生が通訳実務に関わっている。

就学の理由については、複数回答であるが、「プロの翻訳者を目指している」13名(52%)、「翻訳のスキルアップのため」20名(80%)、「就職活動や卒業後の仕事のため」22名(88%)、「翻訳訓練に感心がある」11名(44%)、「語学力の向上」は22名(88%)である。「プロの翻訳者を目指している」学生は約5割で、それほど高くない。このことから、日本語MTIに就学しているが学生が必ずしもプロの翻訳者を目指しているのではないことがわかる。

授業における理論と実践練習の割合についての質問には、「ちょうどよい」5名(20%)、「実践練習の時間を増やしてほしい」14名(56%)、「理論の時間を増やしてほしい」5名(20%)、「その他」1名(4%)であった。学生の回答から、実践練習のみならず、理論の教育も十分ではないことがわかった。

最後に、授業に対して望む改善点について、自由回答形式により答えていただいた。主な回答を以下に紹介したい。

まず、科目に関しては、「翻訳実践練習の科目数、分野の種類を増やしてほしい。もっと多くの専門分野から講師を配置してほしい」という回答が最も多く、現状よりも多くの専門分野における翻訳実践練習科目の開講

が望まれていることがわかった。また、翻訳プログラムでありながら、「会議通訳」や「同時通訳」などを希望する回答も多かった。授業や指導の面においては、「授業内容の充実化」、「授業形式の多様化」を希望する声が多く、「提出した翻訳課題は添削して返却してほしい」、「翻訳上の間違いや改善点をもっと指摘してほしい」、「もっと厳しく指導してほしい」といった個人対応への改善についての要望もみられた。最後に環境面であるが、「コンピュータ室、実習室を設置してほしい」等、教育設備の要望が多い。

アンケート調査の結果をまとめると下記の通りである。同大学日本語MTIの学生は同大学の卒業生が多く、仕事経験のない者が大半を占めている。半数以上の学生は翻訳または通訳実務経験をもっているが、「プロの翻訳者を目指している」学生は52%に過ぎず、将来の就職または職業において、翻訳、語学を使用する業務が含まれていたり、またはそれができると有利である、という理由から就学しているケースも多いようである。授業の内容について、多くの学生が満足しておらず、実践練習と理論の時間を増やしてほしいなどと要望している。このことから、今後の教育・指導体制の更なる充実が求められているといえよう。

IV. まとめ

中国では、日本語通訳者・翻訳者のニーズに応えるために、重点大学のみならず地方大学も積極的に日本語MTIを設置している。本稿では地方大学の一つである曲阜師範大学の事例を通じて、日本語MTIの実態を明確にできたが、いくつかの課題も明らかになった。

まず、日本語MTIが抱えている大きな課題のひとつは、学生の数とその質の確保にある。同大学日本語科の優秀な学生は有名大学に進

学するため、同日本語 MTI の希望者はほとんど中間レベルの学生になる。前述したように、日本語 MTI の半数の学生は同大学の卒業生であるため、質の確保が求められているといえよう。より多くの優秀な学生を募集するために、他の地方大学と同じく授業料を徴収していないが、教育部の政策により、2014 年からすべての大学は大学院生に対して授業料を徴収することになった⁹。この政策を受けて、地方大学日本語 MTI の学生募集は一層困難になるだろう。

次に、教育内容の充実と教員の質的水準の向上も喫緊の課題として挙げられる。アンケート調査結果からわかるように、学生は現在の教育内容に対して十分に満足していない。翻訳実践練習科目の充実、同時通訳の開講、個人への対応など学生の多数の要望に対して、現在の教員陣では応えられないところがある。教員の多くは一応の実務経験を持っているが、通訳と翻訳の専門的訓練を受けていないため、多くの科目を開講できないのである。

最後に、インターンシップ制度の形骸化である。インターンシップは公的機関や民間企業において実際の翻訳業務を体験する目的で実施されるものである。しかし、地理的制約を受けて、大学として確保できる受け入れ機関が非常に少ない。日本での短期無報酬インターンシッププログラムもあるが、実際に学生が従事した業務は翻訳や通訳とあまり関係のないサービス業である。学生の実務経験、職業能力の向上を図るためには、受け入れ機関の確保や大学による支援体制の充実などが求められる。

本稿では中国の通訳翻訳教育について現状と課題を報告したが、日中交流の更なる発展により、中国での日本語通訳・翻訳教育は活発化していくと考えられる。より質の高い学生を確保・養成するには、学習環境、教育内

容、インターンシップ支援体制などの充実が求められる。

脚注*

¹ 本論文は、「日本語翻訳修士実践教育に関する研究」と題する山東省研究生教育創新計画プロジェクト（課題番号：SDYY12061）の成果の一部である。

² 中国曲阜師範大学。

³ 中国貿易外経統計年鑑によると、2011 年、中国に進出した日本企業は 22,790 社である。

⁴ 中国国家旅行局のホームページによる。

<http://www.cnta.gov.cn/index.html>

⁵ 中国教育部ホームページ。

http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/moe_634/201305/151636.html

⁶ 修鋼 [1] による。

⁷ 中国研究生招生情報網ホームページによる。
<http://yz.chsi.com.cn/>

⁸ 無報酬インターンシップの参加費はビザ申請料、協会の仲介手数料、往復航空券代金などこみで 10 万円である。一方、受け入れ企業から 3 ヶ月 15 万円の生活費が支給される。

⁹ 2013 年 2 月 28 日、財政部、国家發展改革委員会と教育部は共同で「研究生教育投入メカニズムの充実に関する意見」を公表し、修士課程と博士課程の授業料をそれぞれ 8,000 元と 10,000 元とした。

*参考文献

[1] 修剛:《中国高等日語教育的現状与展望》,《日語教育与研究》2008 年第 5 期, 1-5 頁。

[2] 鄭鯤騰:《日語翻訳碩士(MTI)模式的探討》,《大觀周刊》, 2012 年第 31 期, 37-38 頁。